

乳幼児をもつ父親の意識調査

河原 有里*・佐田久真貴**

乳幼児をもつ父親の育児ネットワークの実態調査をおこなうため、0.3歳児の子どもをもつ父親を対象にアンケート調査を実施した。配布は、2015年7月から8月にA県B市C市で実施された乳幼児健診および発達相談の場で行い、後日郵送で回収した。質問紙の配布数は450部、回収数は126部（回収率28%）であった。父親が家族以外と子どもについて話をする場合の対象やその頻度について、また、育児支援サービスの利用等について尋ねた。その結果、子どもの話をする父親の方が、夫婦関係をよくとらえ、父親であることを肯定的にとらえていることがわかった。父親にとっても子どもに関する話ができる交友関係の構築が必要であることが示唆された。

キーワード：育児支援・父親支援・育児ネットワーク・ワークライフバランス

問題・目的

近年、女性の社会進出や少子化、核家族化など様々な要因に伴い育児環境が変化してきている。これまで、「父親は外で仕事、母親は家で育児家事」という考え方が強くあったが、母親も仕事をもつことで自然に父親への育児家事分担が求められるようになってきた。

また女性の社会進出は、晩婚化、少子化問題へとつながる。厚生労働省はその対策として、「子ども・子育てビジョン（2010）」を策定した。この政策では4本柱の一つとして、「男性も女性も仕事と生活が調和する社会」ワーク・ライフ・バランスの実現を掲げ、長時間労働者の削減や男性の育児休業取得率・男性の育児家事関連時間の向上に具体的な目標値を設定するなど男性の育児参加の促進を目指している。育児環境の変化に伴い、働き方や育児の在り方の見直しが徐々になさなれてきているが、男性の育児休業取得率は2014年の時点で2.30%であり、成果としてまだ十分とはいえない。

これまでの育児不安研究から、中谷（2008）

は母親が育児不安に陥る要因を父親の存在と育児のネットワークの二つに整理した。母親の日常生活を支えるネットワークの広さや深さ、人間関係の広がりに対する認知など育児のネットワークが育児不安を軽減させ、父親が育児家事行動をしている方が母親の育児不安度は低くなるという。また父親の育児家事行動は、母親の育児不安を低減させるだけでなく、子どもの発達や父親自身の発達に影響を与えることが明らかにされている（牧野，1996）。森下（2006）は、父親の発達という視点から父親になることによる変化として、「家族への愛情」、「責任感や冷静さ」、「子どもを通しての視野の広がり」、「過去と未来への展望」、「自由の喪失」の5つの因子からなる尺度を作成した。その尺度を用いて父親が子どもとの関わりを通してどのような変化を遂げるのかを育児関与の頻度と個人的要因、家族的要因、職場要因の3要因から検討した。その結果、父親になることによる発達は、育児関与により促され、育児関与は親役割を受容していることや夫婦関係に満足していることなど個人的要因、家族的要因、職場要因により促されることが示された。

冬木（2008）の調査では、育児にかかわることによって父親にも育児ストレスや育児不安があること

* 阿倍野区役所

** 兵庫教育大学発達心理研究センター

が明らかになった。このことから父親も母親と同様、育児不安を低減させるために父親の育児ネットワークが必要なのではないかと考えられる。菅田・黒田（2006）の乳幼児をもつ父親の育児効力感についての研究では、仲間づくりの不足が父親の育児効力感に負の影響を与えることが示唆されている。これらをふまえ、家族以外に育児について話すことができる友人の有無など、父親の交友関係が父親の育児ネットワークとして機能するのではないかと考える。

以上より、本研究では、父親の育児ネットワークについてその実態を調査したので報告する。さらに、育児ネットワークと育児支援等の有無、内容についても検証し考察した。

方法

1. 調査方法と調査対象

調査対象は0から3歳児の乳幼児をもつ父親とした。2015年7月から8月にA県B市C市で実施された乳幼児健診および発達相談を受診した母親に、調査の趣旨を説明の上、質問紙の受け取りに同意が得られた場合に無記名の自記式質問紙と返信用封筒を配布した。

2. 調査内容

父親になることによる発達尺度（森下，2006）とそれに関わる要因として、個人的要因に親役割受容感（大日向，1988）、家族的要因に夫婦関係満足尺度（諸井，1996）を用いた。社会的要因には森下（2006）を参考に職場の子育てについての理解度の項目、森田（2008）を参考にワークライフバランスについて、また育児支援の利用度について尋ねた。実際の育児状況は山西（2011）を用いた。父親の交友関係として、子どもについての話をする頻度と話をする相手、話をする手段について尋ねた。基本属性は両親の年齢と就業状況、子どもの年齢、子どもの性別、出生順、家族構成について尋ねた。

3. 分析方法

データ集計と分析はSPSS.ver19を用いた。各項目を集計し、乳幼児を養育する父親の実態把握を

した後、交友関係の中で子どもの話をする頻度を「話をする群」、「話をしない群」に分け、父親の発達とそれに関わる各要因をt検定による群比較をおこなった。

4. 倫理的配慮

研究協力の説明・依頼は書面と口頭で行い承諾が得られた場合のみ質問紙を配布した。研究への協力は自由意志であること、研究協力を承諾した場合でも断る権利があること、本研究以外にデータを使用しないこと、匿名性であることを説明した。

結果

質問紙は450部配布した。そのうち126部回収し、回収率は28%であった。（表1）。

	n	最小値	最大値	平均値	標準偏差
父親年齢	126	23	61	35.09	5.97
母親年齢	126	20	53	33.12	5.00
父親の就労状態	126(100%)				
働いている	40(31.7%)				
専業主婦	67(53.2%)				
育児休業取得中	17(13.5%)				
末子月齢	126	1	47	17.43	11.74
末子の性別	67(53.2%)				
男	59(46.8%)				
女	42(33.6%)				
末子の通園	83(66.4%)				
有	126	1	5	1.23	0.73
無	109(86.5%)				
きょうだいの数	126				
核家族	109(86.5%)				
核家族以外	17(13.5%)				

1. 父親の交友関係

家族以外に子どもに関する話をする頻度について尋ねた（図1）。「よくする」が24.8%、「たまにする」が47.2%、「あまりしない」が16.0%、「しない」が12.0%であった。このうち、よくする・たまにするを「話をする群」、あまりしない・しないを「話さない群」とした。

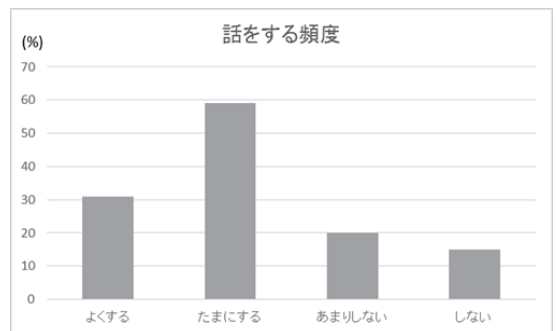


図1 話をする頻度

話をする場合、「子どもに関する日常的な話」、

「子どもに関する悩みや相談」、「育児に関する情報収集」の内容別に話す相手の属性を尋ねた(図2)。どの内容においても、全体的に子どもがいる相手に話をする傾向がみられた。「子どもが生まれてからの友人」の回答は1割前後であり、子どもが生まれてから友人ができた場合、そのきっかけは、「母親同士が繋がっている」ことが約7割を占め、一番多かった(図3)。次いで「育児支援サークルなど育児支援事業」が約4割を占めた。話す際の手段については、「直接会って」が一番多かった(図4)。

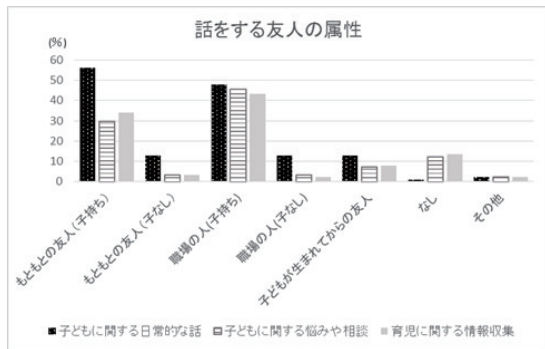


図2 話すをする友人の属性

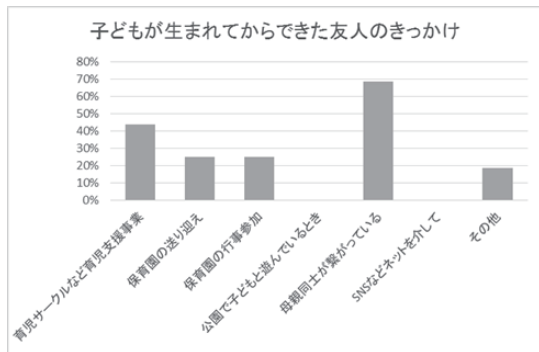


図3 子どもが生まれてからできた友人のきっかけ

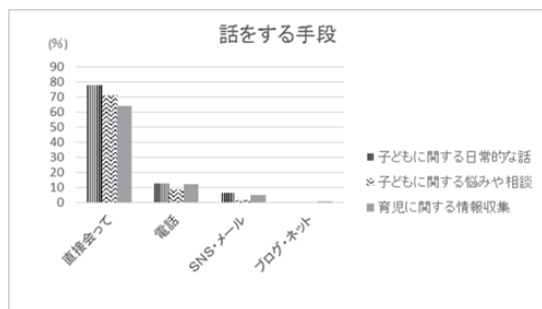


図4 話すをする手段

2. 話す頻度別の群比較結果

父親の発達とそれに関わる各要因の結果を子どもに関する「話をする群」「話をしない群」でt検定による群間比較を行なった。

(1) 父親になったことによる発達

家族への愛情因子、責任感や冷静さ因子、過去と未来の展望因子、自由の喪失因子の各因子でt検定を行なった。そのうち、家族への愛情因子 ($t(123) = 2.08, p < .05$) と自由の喪失因子 ($t(123) = 2.82, p < .01$) に有意な差が見られた。家族への愛情因子では、話をする群の方が話をしない群よりも得点が高く、家族への愛情を感じていることを示す。自由の喪失因子では、話をしない群の方が話をする群よりも得点が高く、親になることによって自由の喪失や拘束感を感じていることを示す。

(2) 親役割受容感

MP尺度得点、MN尺度得点ごとにt検定を行なった。MP尺度得点は話をする群の方が話をしない群の方より有意に得点が高く、親役割について肯定的に捉えていることが示された ($t(122) = 2.76, p < .01$)。MN尺度得点は話をしない群の方が話をする群より有意に得点が高く、親役割について否定的に捉えていることが示された ($t(122) = 2.51, p < .05$)。

(3) 夫婦関係満足尺度

夫婦関係満足尺度得点は、話をする群の方が話をしない群より有意に高く、夫婦関係に満足を得られていることが示された ($t(123) = 2.24, p < .05$)。

(4) 育児支援について

育児支援の利用・参加経験について尋ねた(図5)。最も回答が多かったのは、「出産の立ち合い」で約半数以上が経験していた。次いで回答が多かったのは「出産前の子育て教室」で協力者の約4割が参加をしていた。しかし出産後になると育児支援の参加はいずれも1割前後となった。父親の場合生まれてからの育児支援の参加は減少傾向にある。また約3割の協力者は、出産前後共に育児支援の参加をしていないと回答した。

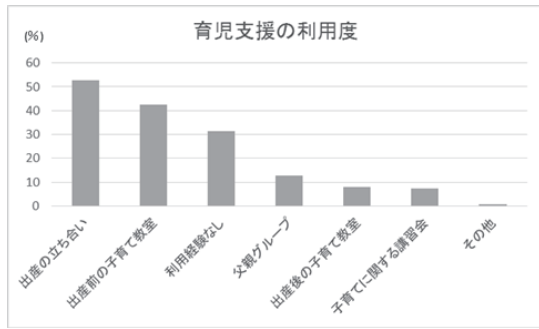


図5 育児支援の利用度

育児休業の取得経験の有無とその理由および取得したいと思う条件について尋ねた (表2)。

表2 育児休業について

育児休業取得経験(n=126)	有	10.4%(n=13)
	無	89.6%(n=113)
育児休業をとらなかった理由 (n=113)	勤め先に周知されていない	28.0%
	職場に迷惑をかける	33.6%
	育児は母親がするもの	3.2%
	資金・処遇にダメージが大きい	14.4%
	その他	17.8%
育児休業をとりたいと思う条件 (n=113)	資金処遇の保証があれば	34.4%
	職場の雰囲気改善	39.2%
	育児休業は取りたくない	15.2%
	その他	6.4%

育児支援の利用について、話をする群と話をしない群での有意な差は見られなかった。

(5) 実際の育児状況

育児項目や育児関与時間に、話をする群としない群での有意な差は見られなかった。

考察

1. 配布および回収結果と対象者の基本属性

質問紙450部の配布に対し、回収が126部、回収率が28%であった。低い回収率となった理由として、対象者へ直接渡すことができず、妻を介しての配布になったことが考えられる。質問紙を受け取った妻が夫へ質問紙を渡すには、ある程度の夫婦の関係性が必要であると考えられる。また夫が質問紙を受け取ったとしても、質問項目が多く気軽に実施できるアンケートではないため、今回、質問紙のすべてにチェックし返送した協力者は、比較的夫婦関係が良く、協力的で意識が高い集団と考えられる。

2. 父親の交友関係

回答者のうち、約7割が子どもに関する話を「よくする・たまにする」と回答し、話をする父親の

方が多かった。一方、「あまりしない・しない」との回答が約3割あり、そのうち「しない」と回答した父親は1割以上存在した。子どもに関する話を「あまりしない・しない」理由に子どもの話ができる相手が身近にいないことが挙げられるとすると、約3割の回答者が育児支援のキーワードである育児ネットワークが乏しいことになる。また、ベネッセ教育総合研究所が2014年に行った「乳幼児の父親についての調査」では、「子育てについて話せる友人」について、約5割が「いない」と回答し、父親の育児ネットワークは築かれにくいと言える。

子どもの話をする相手については、もともとの友人や職場に関する人で、その相手にも子どもがいる場合が多く、相手にも子どもがいることが話をしやすいポイントと考えられる。どちらも父親の生活環境の中に存在する相手であり、「子どもが生まれてからできた友人」との回答は1割前後であった。これより父親の場合、子どもが生まれてからの交友関係は広がりにくいことが推察された。子どもが生まれてから交友関係が広がる場合、そのきっかけは、母親同士のつながりが一番多く、次いで育児サークルなどの育児支援事業が多かった。父親を対象とする育児支援はあまりないのが現状であるが、やはりそのような機会が父親の育児ネットワークを広げるために重要であることが示された。話す内容については、どの相手の場合にも比較的「子どもに関する日常的な話」が多かった。なかには子どもに関する日常的な話はするが、子どもに関する悩みや相談、育児に関する情報収集については話をしないという回答者もいた。

話をする手段については、「直接会って」が一番多かった。話す相手が職場の人やもともとの友人など父親の生活の中で日常的に会うことができる相手のため、直接会って話すという回答が多かったとみられる。反対に、メールや電話などの回答が少なく、子どもに関する話をするためにわざわざ手段を使っておこなうことはあまりないようである。

今回乳幼児をもつ父親の交友関係がどのようなものなのか把握するため、話をする頻度および話をする相手、その手段について尋ねたが本調査からは、乳幼児をもつ父親は育児情報や困りごとがないため話すことを必要としていないのか、必要としているが話をする事ができないのか話をしない背景まで把握することができなかった。そもそも父親は子どもに関する話をしたいのか、必要性を感じているのか、今後父親がどのように感じているのか検討するため父親の話をすることに対する認識について尋ねていく必要性がある。

子どもに関する話をする群としない群と比較した際、話をする群の方が、親役割受容感、夫婦関係満足度、父親になることによる発達尺度のうち家族への愛情因子と自由の喪失因子で差が見られた。これは話をする群の方が、夫婦関係をよく捉え、親であることや育児に対して肯定的に受け止めていることを示す。また、ベネッセ(2015)の調査でも、子育てについて話せる友人がいる方がいないと回答した群より、子育てについて肯定的にとらえていた。反対に、子育てについて話せる友人がいない群の方がいる群より、育児ストレスや育児不安などを感じていた。松田(2011)によると世帯外の育児ネットワークの規模が大きいほど母親の育児不安は低く、親族と非親族が適度に混合しているネットワークの方が、母親の育児不安は低くなることも明らかにされているが、父親においても同様に育児ネットワークとして子どもに関する話を友人にすることやその存在が父親の育児不安を低減させるために必要であることが示唆された。父親の交友関係は、父親の精神的健康だけでなく、夫婦関係と育児不安に関連のある(橘ほか, 2008)妻にとっても利点となる。

これらのことから、育児中の父親にとって子どもに関する話ができる交友関係の構築が必要であると言える。

引用文献

阿部範子(2006). 母親の育児不安と夫の育児支援との関係 母性看護 37, 137-139

安藤哲也(2010). パパ友をつくろう! .地域における父親ネットワークの効力. 児童心理 金子書房 64, pp74-81

ベネッセ教育研究所(2015). 第3回乳幼児の父親についての調査(速報版)ベネッセホールディングス pp17-21

原田正文(1993). 育児不安を超えて 朱鷹書房 pp94-96

福丸由佳(2000). 乳幼児をもつ親の多重役割と抑うつ度との関連.父親を中心としたインタビューによる調査結果から.人間文化論 3, 133-143

冬木春子(2008). 父親の育児ストレス 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子(編)男の育児・女の育児.家族社会学からのアプローチ. 昭和堂 pp137-160 ;

菅野尚子・黒田緑(2014). 乳幼児を持つ父親の育児に対する自己効力感と影響要因の検討 母性衛生学会 55, 210

厚生労働省(2014). イクメン企業アワード 2014 受賞企業における特徴的な取組概要 厚生労働省

http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11903000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Shokugyokateiryouritsuka/01_ikumenaward_1.pdf(2015.11.6)

厚生労働省(2009). 子ども子育てビジョン 厚生労働省

<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/vision-gaiyou.pdf>(2015.11.6)

厚生労働省(2014). 子どもを産み育てやすい環境づくり 平成26年度版厚生労働白書

<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/14/dl/2-01.pdf>(2015.12.15)

厚生労働省(2014). 平成26年度雇用均等基本調査(確報) 厚生労働省

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/71-26r.html>(2015.11.6)

国立社会保障・人口問題研究所(2010). 第14回出生動向基本調査 国立社会保障・人口問題

- 研究所
<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14/point14.pdf>(2015.12.15)
- 小崎恭弘 (2011). 子育て支援における父親支援プログラムの取り組み. 全国子育て支援センターアンケート調査結果より. 子ども家庭福祉学 (神戸常盤大学短期大学) 11, 25-34.
- 牧野暢男 (1996). 父親にとっての子育て体験の意味. 牧野カツコ・中の由美子・柏木恵子 (編) 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書房 pp50-58
- 松田茂樹 (2001). 育児ネットワークの構造と母親のWell-Being. 社会学評論 52, 33-49
- 森下葉子 (2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究 17, 182-192
- 森田美佐 (2008). 父親は育児休業をとりたいのか? 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子 (編) 男の育児・女の育児. 家族社会学からのアプローチ. 昭和堂 pp181-206
- 諸井克英 (1996). 家庭内労働の分担における公平性の知覚. 家族心理学研究 10, 15-30.
- 中西雪夫 (1998). 乳幼児をもつ母親の育児不安. 父親に関する諸要因の影響. 家族関係学 17, 1-11
- 中谷奈津子 (2008). 子どもから離れる時間と母親の育児不安. 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子 (編) 男の育児・女の育児. 家族社会学からのアプローチ. 昭和堂 pp45-68
- 尾形和男 (2011). 父親の心理学. 北大路書房 pp20-31
- 大日向雅美 (1988). 母性の研究. 川島書店 pp135-169
- 島田三恵子 (2014). 母親が望む安全で満足な妊娠出産に関する全国調査. 厚生労働科学研究費補助金 政策科学総合研究事業
http://minds4.jcqhcc.or.jp/minds/pregnancy/G0000595/01_Introduction.pdf(2015.12.14)
- 橘千恵・中村絵里子・中島夕美・石田貞代・荻原結花 (2008). 夫の育児家事行動の特徴と子どもへの愛着, 夫婦関係満足度との関連. 妻との比較. 母性衛生学会 49, 68-73.
- 山根真理 (2008). 「次世代育成支援」時代の母親意識. 大和礼子・斧出節子・木脇奈智子 (編) 男の育児・女の育児. 家族社会学からのアプローチ. 昭和堂 pp69-90
- 山根真理・松田智子・斧出節子・関井友子 (1990). 保育園児をもつ母親の
- 山西裕美 (2011). 父親の子育て参加規定要因についての研究. 両親の就労形態との関連で. 社会関係研究 16, 59-89.

参考文献

- 中島久美子・高橋恵・國清恭子・新井忍・今関節子 (2005). 生後6ヵ月児をもつ母親が群馬保健学紀要 26, 19-26.
- 本保泰子・八重樫牧子 (2003). 母親の子育て不安と父親の家事育児・子育て参加との関連に関する研究. 川崎医療福祉学会誌
- 住田正樹・中田周作 (1999). 父親の育児態度と母親の育児不安. 九州大学大学院教育学研究紀要 2, 19-38.

Consciousness investigation of fathers with infants and toddlers

Yuri Kawahara*, Maki Sadahisa**

*Abeno Ward office

**Center for Research on Human Development and Clinical Psychology, Hyogo University of Teacher Education

Abstract

The questionnaire was conducted to survey childcare network among fathers with infants and toddlers. The questionnaire was distributed in cities B and C in A prefecture July to August 2015, on the sites of medical check-up for infants and toddlers, and growth consultation. The questionnaire was collected later by mail. 450 questionnaire were distributed, and 126 (28%) were collected later. The questions were; to whom fathers talk about their children other than family members, and its frequency, and their usage of childcare supporting services. The result shows that more fathers talk about their children, the better view they have about their marital relationships, and also have more positive view about being a father. It is suggested that it is necessary for the fathers to build up acquaintanceship in which they can talk about their children.

Key Words: Childcare, Fathers support, Childcare Network, Work Life Balance